こしがや能 第三十二回 秋の調べ

令和六年 十一月四日（月・休）
開場 十二時三十分　開演 十三時

おはなし　清水　義也

【仕舞】

敦盛（クセ）　古橋　美香
葛城（キリ）　由田　久子
小鍛冶（キリ）　岡庭　祥大

【舞囃子】

唐船　高梨　良一
大鼓　亀井　洋佑　太鼓　林　雄一郎
小鼓　田邊　恭資　笛　熊本俊太郎
地謡　渡邊　洋子　坂井　音雅
木月　宣行　藤波　重彦
岡庭　祥大
地謡　井上裕之真　清水　義也
関根　知孝　坂井　音晴

【狂言】

附子（シテ）　山本泰太郎
アド（主人）　若松　隆
小アド（次郎冠者）　山本凛太郎

～休憩　二十分～

【能】

子方（源義経）　古橋　真司
前シテ（静御前）
後シテ（知盛ノ怨霊）　関根　祥丸
船弁慶　ワキ（武蔵坊弁慶）　大日方　寛
前後之替
間（船頭）　山本　則重
大鼓　亀井　洋佑　太鼓　林　雄一郎
小鼓　田邊　恭資　笛　熊本俊太郎
後見　清水　義也　関根　知孝
地謡　由田　久子　坂井　音雅
井上裕之真　藤波　重彦
坂井　音晴　浅見　重好
木月　宣行　岡庭　祥大

附祝言

（終了予定時間　十六時頃）

演目紹介

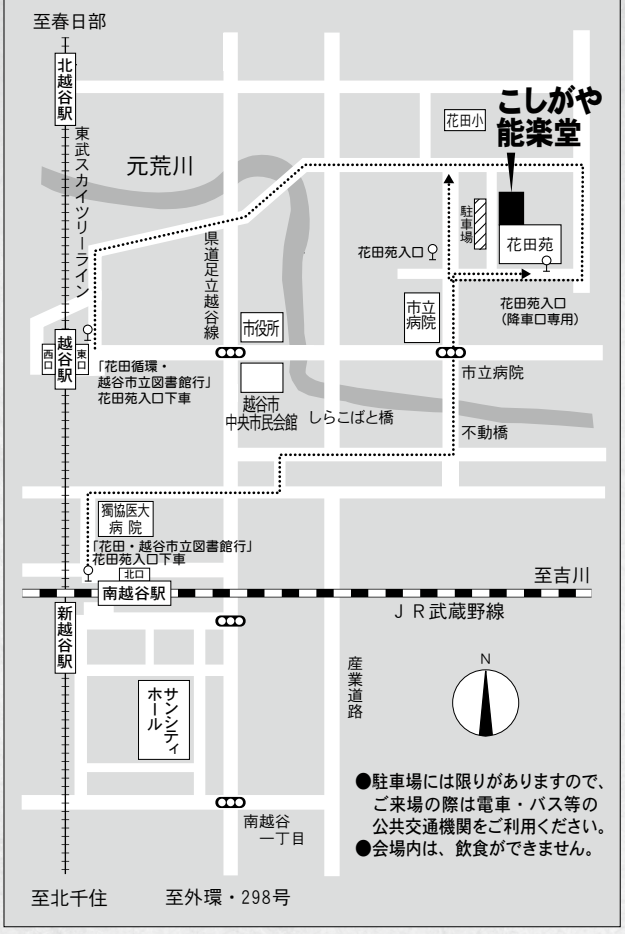
狂言「附子（ぶす）」

家の主人から留守番を言いつかった太郎冠者と次郎冠者。「あの桶には附子という猛毒が入っているから、絶対に近づくな」と念を押されますが、どうしても気になります。

二人は、慎重に桶に近づき、とうとう中を覗いてしまいます。すると、中身は附子ではなく、おいしそうな砂糖だったのです。二人は我慢できず、全部平らげてしまいます。そして、言い訳のために主人の大切な掛け軸や、茶椀を壊して、大声で泣きながら主人を待ちます。二人は、驚き怒る主人に、わけを話すのですが…。

能「船弁慶（ふなべんけい）」

源義経（子方）は平家討伐後、兄・頼朝と不仲となり、武蔵坊弁慶（ワキ）と従者（ワキツレ）とともに、都を出て西国に落ち延びるため摂津国・大物の浦に着きます。弁慶は、ここまで後を追ってきた静御前（前シテ）について、困難な道のりをこれ以上進むことは難しいので都へ帰すように義経に進言します。静御前は、義経との別れの宴で、一行の前途を祈り、舞を舞いはじめます。旅立っていく一行を見届けた静御前は、涙ながら別れを告げます。

義経が静御前への未練から出発をためらっていると弁慶は、すぐに船を出すように船頭に命じます。船が沖へと進むにつれ、天候は悪化してゆき、波の上に、壇ノ浦で滅んだ平家一門の亡霊が現れます。なかでも総大将であった平知盛（とももり）の怨霊（後シテ）は、是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかります。義経は、刀を抜き応戦し、弁慶は、数珠を揉んで経文を唱えます。こうして祈り続けると、ついに知盛の怨霊は流れ去り、あとにはただ白波が残るだけでした。

「こしがや能楽堂」案内図